

猿払村

永沼 里枝子

地名の由来

猿払（サルフツ）の語源はアイヌ語の「サロプト」「サラブツ」から転化したもので『葦（芦）川口』『葦（芦）原の河口』を意味している。

歴史

サルフツの地名は、文化4年（1807）北方からの外国侵略の防備巡察に來道した近藤重蔵にしたがって宗谷に來た幕吏田草川伝次郎の「西蝦夷日記」に登場し[サルブツ…蝦夷家十一件、男女五十四人、同所乙チウトラアイノ、同カテレバアイノ]とある。

これより先、寛政10年（1798）7月6日、宗谷に來た幕吏三橋藤右衛門の隨行の武藤勘蔵が巡察模様を記した「蝦夷日記」に、藤右衛門が宗谷の前浜にソウヤをはじめ、トンベツ、トママエまでの役付や主だったアイヌを集め大酒宴を開いたが、この席にサルフツから嶋綿入りを着た「トンハライ」なるアイヌが招かれたと書き残されている。

宗谷村から分村し猿払村が誕生して80年以上・・・明治11年北海道開拓本庁から宗谷郡に6村を設定するという公文が付達され、その中に猿払が明記されて120年以上・・・武藤勘蔵の「蝦夷日記」に記されてから2世紀の歳月が経つ。

地理・気候

総面積は590K m²を有し、村としては北海道で一番広く、総面積の約8割が山林や原野であり、手つかずの自然がいっぱい残っている。

東部は約33kmの海岸線を通じて豊富な水産資源を誇るオホーツク海を臨み、西・北・南部は脊梁を低下しながら幌尻山・エタンバック山を中心に、標高200mから400m前後の宗谷丘陵が連なっています。中央部から東部にかけては広大な耕地や原野が広がっており、役場所在地の鬼志別を中心として大小11の集落が形成されている。

また、宗谷丘陵を水源として猿払川など6水系が緩やかな流速で屈曲しながらオホーツク海に注いでおり、下流域には大小の沼や湿原を形成している。

土壌及び地質は、山地及び丘陵地は右生層の砂岩・泥炭・残積土壌であり、海岸段丘地は、砂岩・夏岩・砂層・海砂等の風化推積層よりなる洪積土壌、低湿地は沖積土壌及び泥炭土壌である。

季節ごとに見ていくと次のようである。

春：3月中旬を過ぎる頃シベリヤ大陸の高気圧が衰えて、北西の冷たく厳しい吹雪の日が少なくなり、4月には融雪が一気に進み平野部では雪の姿は消える。

5月から6月には移動性高気圧の影響を受け、比較的天候は安定しますが空気は乾燥する。

夏：7月から8月にかけて北太平洋高気圧の圏内に入り、気温もしだいに高くなり、時には30度近くまで気温が上がることもある。

しかし、オホーツク海高気圧が強まり停滞すると長期間にわたって低温の湿潤な天候が続く、夏期高温期間は短い夏となる。

秋：9月の中旬を過ぎる頃、秋は駆け足で近づき、朝夕は急激に涼しくなり山間部では紅葉がはじまる。シベリヤ大陸からの寒冷な高気圧の兆しが見られるようになり、雷雨の発生とともに降水量が最も多い時期となる。

10月下旬から11月上旬には初雪が観測される年もあり冬真近かとなる。

冬：12月に入ると西高東低の冬型気圧配置の日が多く、本格的な冬の到来となる。

年末から2月くらいまでの期間には、南極のブリザードを思わせる吹雪も数回ある。積雪量は150cmを越す年もあるが、並年は100cm前後となっている。また、2月から3月にかけて流氷が接岸すると冷え込みが強くなり、最低気温が氷点下20度を超える厳寒の日もある。

東経 141°57'45"～142°20'50"
北緯 45°02'55"～45°23'55"

図1 猿払村の位置



図2 猿払村の近隣市町村拡大図

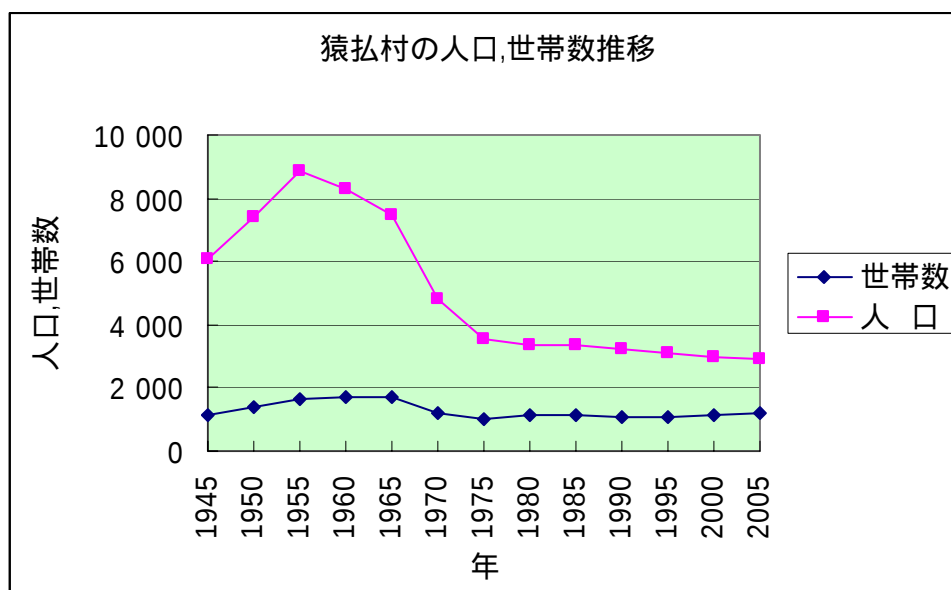


出典：猿払村役場ホームページ

猿払村は「日本最北の村」として、北海道の最北部にあたる宗谷支庁管内のほぼ中央に位置し、カナダのモントリオールとほぼ同じ緯度にあたる。

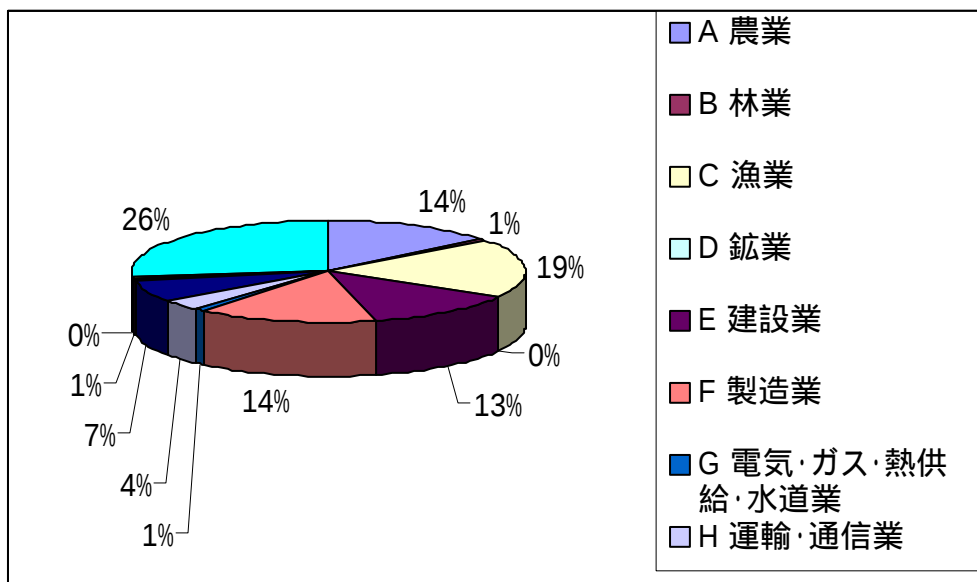
猿払村の東はオホーツク海の海岸線、西は丘陵性山地を境に豊富町、南は幌延町、浜頓別町、北は稚内市に隣接している。

人口・世帯数の推移



1955 年まで増加していたが、1955 年から 1975 年にかけて急激に減少している。1975 年から現在にかけても、少しずつではあるが減少している。

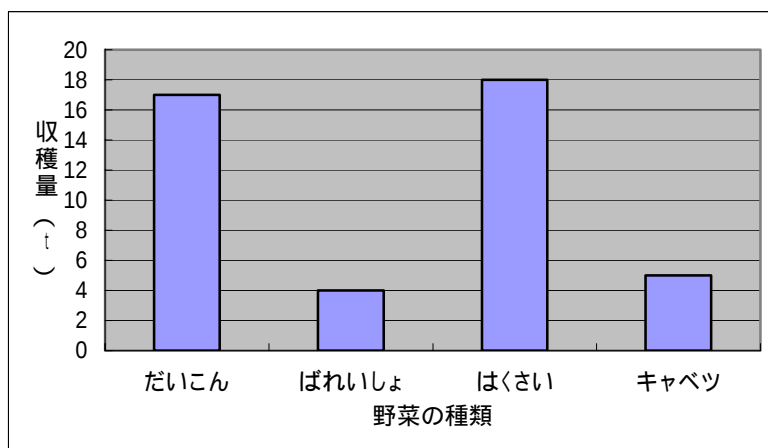
産業別人口



上記より、鉱業のしめる割合が大きいことがわかる。これは、鬼志別・興北という鉱山があるためだと思われる。

猿払の漁業は、魚場造成や孵化・放流・育成事業など、村と漁業者が一体となって資源管理型漁業への転換に力を注ぎ、豊かなオホーツクの魚場をつくっている。そして今、水揚げ日本一を誇るホタテ貝を中心に、毛ガニやサケ、マスをはじめとするオホーツク海の自然の恵みを糧とする猿払の漁業では、村の活気を支えるひとつの柱として、新鮮で美味しい魚介類の安定供給のため資源管理型の育てる漁業を推進している。

農業



本村の農業は、明治 30 年の北海道国有未開地処分法による大農牧場によって幕が開けられ、その後戦前に入植者により開墾への鍬入れがされた。戦後の山形県からの集団入植は村の農業を語る上で、欠くことのできない今日の酪農業の礎である。

農業形態は昭和 31 年天北集約酪農地域の指定を契機として、酪農経営への転換を図り、更に昭和 38 年従来からの混同農業から安定した酪農専業の道を選択し今日の基幹産業としての酪農業の地位が確立された。

村内の広大な農用地のほとんどが牧草畑で、村営牧場を中心とする一大酪農王国が広がっている。経営の合理化・近代化・農用地の集積・後継者対策に努めながら、良質な乳製品づくりを推進し、中でも後継者育成については、酪農ヘルパー制度、実習生の受け入れ、酪農家同士の情報交換、農村花嫁対策などの充実を図ると共に、積極的に新規就農者の受け入れ体制の整備に取り組んでいる。

また、魅力ある農村環境づくりに向け、クリーンな牛舎や生産設備の整備など生活・生産環境の改善し、自然と調和した酪農を目指し、村民や観光客にも親しんでもらえるような統一的な農村イメージを喚起させる景観の整備も図っている。

観光

さるふつ公園（道の駅）周辺

国道 238 号線沿い、サハリンの島影を望む雄大なオホーツク海と牛達の楽園となっている広大な村営牧場に囲まれ「さるふつ公園」がある。

公園全体が「道の駅」に指定され、さまざまな施設が整備されており、村民の憩いの場であるとともに村の観光の拠点となっている。

自然体感スポット

猿払村は、北オホーツク道立自然公園の中心にあり、海岸線沿いには大小の沼や原生花園などの湿地帯が点在し、貴重な高山性植物、ミズゴケ群落、アカエゾマツ湿地林などが残存する。

また、河川や沼には、自然環境のバロメーターとも言われている日本最大の淡水魚「イトウ」が棲息するなど、豊かな自然環境に恵まれている。

この大自然は、四季折々に変化し私たちに魅了させてくれる。

さるふつ温泉

目の前に広がる紺碧のオホーツク海、牛たちがゆったりと草をはむ村営牧場、そんな風景に包まれた「さるふつ温泉」は、さるふつ公園内にある。

日本最北の村が全国に誇れる良質の温泉に浸かって、身も心も解放されるくつろぎの時間を楽しめるだろう。

泉質～ ナトリウム 塩化物泉（食塩泉）



アルカリ性泉PH値 9.9 は全国でもトップクラスの美容と健康に効く泉質。

効能

神経痛・筋肉痛・関節痛・五十肩・運動麻痺・関節のこわばり・うちみ・くじき・痔疾・
慢性消化器病・慢性皮膚病・病後回復期・疲労回復・健康増進・虚弱児童・慢性婦人病・
冷え性・きりきず[※]・やけど